

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員 中桐正夫

*東京天文台で撮影された黄道光と60m 鉄塔

何かと情報を寄せてくれる野地一樹氏が珍しい写真を送ってくれた。天文ガイド1968年11月号に掲載されたもので、野地氏は、撮影者はおそらく富田弘一郎氏であろうと書かれている。戦前に東京天文台構内から撮影された黄道光の写真で、手前に東京天文台構内にあった三鷹国際報時所の60m鉄塔が2本写っている(写真1)。脚注があり、それには「三鷹で写した西天の黄道光 1938年2月25日19時0分～19時50分、戦時中に倒された無線



写真 1

報時受信用のアンテナが見える。このアンテナは4本あって高さ50m。中央線の電車から見えたものだ。」と書かれている。

富田弘一郎氏は1925年2月16日生まれである。この写真は1938年2月25日に撮影されたものであるから、もし富田氏が撮影したものなら13歳の時に撮影したことになる。富田氏は青山学院専門学校を卒業し1947年に東京天文台に入っている。13歳の富田氏が撮影した可能性は否定できないが、無理があるようにも思える。国立天文台の図書室に1968年11月号の天文ガイドがないので、直ちには検証できない。写真に写っている60m鉄塔が軍によって倒されたのは1945年4月のことである。また、この60m鉄塔のアンテナに軍の飛行機が接触し墜落炎上したのは1943年8月のことである。この事故で搭乗員の中島中尉が亡く

なっている。これらのことについて筆者はアーカイブ室新聞に何度か記事を書いている(第164号、第172～174号、第177～178号)。東京天文台の歴史の中でも悲惨な出来事であった。軍は東京天文台の南南西のごく近くにある調布飛行場を飛び立った軍の飛行機が墜落した事故の遺恨返しに鉄塔を倒したのではなく、1945年3月10日の東京大空襲以降、制空権を完全に握られた米軍の爆撃機を高射砲で撃墜するのに邪魔だという理由であった。軍の高射砲陣地は東京天文台東側の大沢を挟んだ国分寺崖線と呼ばれる崖の脇の高台にあった。

三鷹の1938年の西空に黄道光が見えるほど空が暗かったということである。戦時中、1945

年（昭和 20 年）頃には米軍の爆撃を恐れた燈火管制下にあったが 1938 年頃はまだ燈火管制はなかったと思われるので、戦前の三鷹はまだ空が暗かったのであろう。

しかし、撮影日時がこれほどはっきりしている東京天文台構内の写真は珍しい。今や、国立天文台構内に 60m 鉄塔（脚注には 50m と書かれている）あったことを知っている者は少ない。筆者は 60m 鉄塔の痕跡を調査して、その土台を発掘して見学の対象にしている。筆者が 60m 鉄塔のことを知り始めた後に何枚かの写真が提供されている。そのうちのいくつかを紹介しておく。写真 2 は 65 cm 屈折赤道義望遠鏡の背後に移った 60m 鉄塔である。写真 3 は三鷹国際報時所と一緒の 60m 鉄塔である。



写真 2 観測施設は左からゴーチェ子午環、レプソルド子午儀、65 cm 望遠鏡

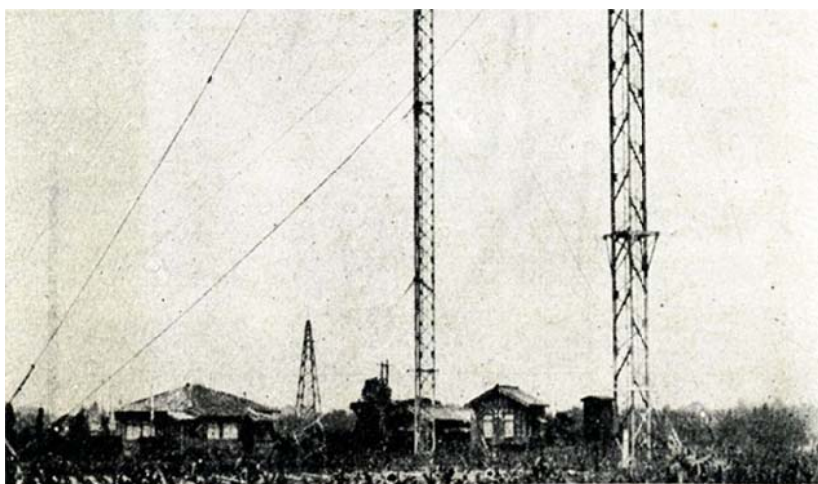


写真 3 60m 鉄塔が 3 本写っている、三角の櫓は一等三角点「三鷹村」の櫓
これらの写真は国立天文台にとって貴重なものである。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp